

開会の挨拶

鍋島：皆さま、こんにちは。本日は龍谷大学にご来場いただき、誠にありがとうございます。本日の司会進行を務めます、文学部教授の鍋島でございます。どうぞよろしくお願いいたします。ただ今より、龍谷大学世界仏教文化研究センター開設記念事業特別講演会を開催いたします。

この世界仏教文化研究センターは1961年の設立である仏教文化研究所と、2002年以降、文部科学省の私立大学学術高度化推進事業に採択された人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター、及び2010年より文部科学省の私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択されたアジア仏教文化研究センター、仏典翻訳部などが統合されて、赤松学長の下で2015年に設立されました。

まず初めに、この世界仏教文化研究センターを設立してくださいました、本学学長、赤松徹真先生よりごあいさつ申し上げます。

赤松：皆さん、こんにちは。学長の赤松でございます。本日は特別講演会に、大変ご多用の中、ご参加いただきましたことを厚く御礼申し上げたいと思います。大学を代表して、一言、ごあいさつを申し上げます。

本学の歴史は江戸時代、1639年に西本願寺境内に設けました学寮を出発点としております。以来、江戸時代から明治、そしてまた戦後という、幾度かにわたる政治社会の激変を経験しながら、時代社会の本質を見極めつつ、大学としましては柔軟かつ積極的に学術研究、そして教育に取り組んできたところでございます。

378年目を迎える本学ではありますが、激動の時代を超えて、浄土真宗の精神を基礎とした普遍的かつ根源的な、そして豊かな人間教育を一貫して追及してまいりました。同時に、多方面にわたる学術研究も果敢に展開してきたところでございます。そういった成果につきましては、地域、あるいは社会、さらには世界に発信しながら、豊かな人間性、確かな知性を兼ね備えた学生を育成する。さらに研究者を養成していくという、本学の使命を積み重ねてまいったところであります。研究方面についても、基礎的あるいは応用的分野の成果を広く、学術分野のみならず、世界あるいは日本社会に還元したところであります。



こうした歴史と伝統を有する本学が積み上げてきた卓越した仏教研究の実績を礎にして、今日のグローバル化する世界に向き合いながら、発展的に国際的な研究拠点をつくりたい。こういった目的の下で、昨年度、世界仏教文化研究センターを発足したところでございます。ご案内のように、グローバル化が進行して、知識の情報化が加速し、またかつての欧米型の世界主導という事柄についても、混沌

とした現実が今まさに露出しているところでもあります。そういった現実の世界を、どこかが、誰かがということではなくて、誰もが誰のものでもないこの世界をどのように今後まとめていくのかという、こういったことは本質的課題であると同時にまた喫緊の課題として、私たちは認識しております。その際、私たちの長い歴史で培ってきた仏教研究、あるいは仏教に関わる世界の考え方、あるいは人間の考え方、そういったものを、今後、研究を通して、より一層、今日の社会に、世界に発信して、仏教の持つ現代的可能性を積極的に探ってまいりたい。こういったことの研究が、今、スタートしております。

私たちの大学も、大学としての、高等教育機関としての使命、今日の山積する課題に積極的に関与しながら、解決の道を切り開いていくという、こういった使命、役割が、今、大学に求められるところでもあります。私たちは世界仏教文化研究センターの発足を通して、皆さんから期待される大学像をつくり上げて、社会に貢献してまいりたいと、このように考えております。

この特別講演会につきましては、昨年度から開催をしております記念事業の一つでもございます。昨年度は主に学術研究を中心とした展開をしてまいりましたけれども、本日は広く多くの方々に参加をいただく形で、本研究センターの趣旨、内容をこの度の特別講演会として、広く知っていただくために開催したところであります。特に第3部におきましては、ご登壇をいただきます池上先生、そして竹村先生に私も加わらせていただきまして、鼎談をいたしたいと思っております。有意義なものとなるように、私も楽しみにしているところであります。

本日はご参加いただきました皆さんにとっても、この特別講演会が実り多いものとなりますよう心から念願を申しあげますと共に、当研究センターへのご期待、またご支援を寄せていただけますようお願いを申しあげたいと思っております。特に本日はご来賓として大変ご多用な中、門川京都市長様にもお越しをいただきました。この後、ごあいさつを頂くことを大変ありがたく存じていることでございます。

結びに当たりまして、大変ご尽力を頂きました関係の皆さん方に高い席からでございますけれども、厚く御礼申しあげまして、私からのごあいさつとさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

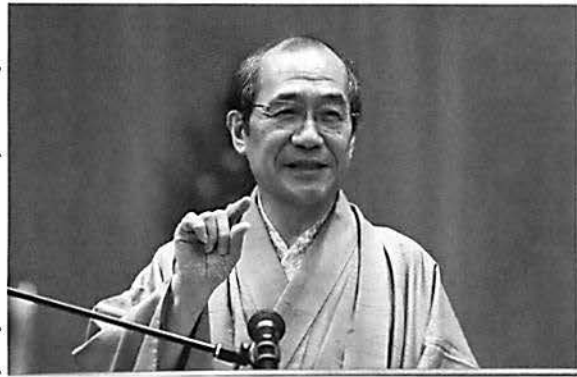
鍋島：赤松学長、ありがとうございます。ただ今、学長よりご紹介がありましたように、今日、ご多用の中、京都市長、門川大作様にご来賓としてご臨席いただいております。いつも大学のためにご支援いただいている京都市長より、お言葉を頂きたいと思っております。よろしくお願いいたします。

門川：皆さん、こんにちは。ご紹介を賜りました、京都市長の門川大作です。親鸞聖人の教えを基に、378年にわたって真実を求め、真実に生き、真実を顕かにする尊い学問研究、教育の活動をされてきました龍谷大学に敬意を表します。

今、赤松徹真学長から話がありましたように、貴学は、さまざまな伝統の中で改革を進めていただいております。世界仏教文化研究センターの開設も本当に尊いことだと思いますし、能仁センター長をはじめ、皆さん方に敬意を表します。

また、本日は池上先生、竹村先生、ありがとうございます。

歴史都市・京都には誇るべき都市の特性がたくさんございます。文化、芸術、自然との共生、宗教都市、ものづくりなど、それら多くの誇るべき特性の中で、私が未来に向かって一番大切にしたいものの一つが「大学のまち・学生さんのまち京都」だと思います。どのような人を育てていくのか。これが日本はもとより、世界の人々の幸せと平和にかかっている、このように思います。



「大学のまち・学生のまち京都」の発展においては、龍谷大学が大きな役割を果たしていただいております。また、京都市内にある38（平成29年1月29日現在）の大学、短期大学と周辺の大学を含めた50（平成29年1月29日現在）の大学、短期大学で（公財）大学コンソーシアム京都をつくり、本市と、さまざまな協働の取り組みを進めていただいています。赤松先生におかれては、昨年6月まで、長年にわたり、同財団の理事長として、大きな役割を果たしていただきました。心強い限りであります。

京都市は約40年前（1978年）に世界文化自由都市を宣言しました。都市は理想を必要とするものですが、本市においては、「全世界の人々が、人種、宗教、社会体制の相違を超えて、平和のうちに、この京都に自由につどい、交流を通じて新たな文化を創造する」そんな「世界文化自由都市」を理想としています。京都は1,000年を超える独自の文化を育んできました。しかし、孤立して生きるべきではありません。世界文化自由都市、これを実践する。そして、文化を基軸とした都市の経営をしていく。これが同宣言の目指すものですが、あまり知られていないようです。実はこの宣言の一番最後には「われわれは静かに決意して、これを誓うものである。」と書いてあるのですね。ちょっと静か過ぎたかなと思います。

さらに、21世紀の幕開けを目前に控える1999年には、この宣言における理想像を具体化し、本市のまちづくりの方針となる「京都市基本構想」の改定を行いました。市民参加の下に侃侃々々の議論を行い、議会の議決もいただき、1999年12月に制定しました。その第1章となるのが「京都市民の生き方」です。基本構想は日本中の自治体に存在します。都市のインフラをどうするか。産業、文化、教育、福祉政策をどうするか。これがだいたい冒頭に出てきます。しかし、京都市民が策定した、選んだ基本構想の第1章は、1,000年を超えて大事にしてきた日本人や京都人が大切にしてきた生き方、信頼、それをもう一度、確認しようというものでした。当時は、バブル経済がはじけて、非常に厳しい都市間競争などが叫ばれていた時代でありました。しかし、過度の競争ではない。日本人が大事にしてきた生き方、京都に伝わる生き方、それをもう一度、大事にしたときに、展望が開けるだろう。こういうものでありました。「目利き」、「心に極める」、「もてなし」、こうした京都人が大事にしてきた生き方をもう一度、見直そう。これは龍谷大学が長年、大事にしてこられた「真実を求め、真実に生き、真実を顕かにする」という姿勢と共通するものではないかなと思っています。

仏教精神を、またあらゆる宗教を寛容に受け入れていく。そんな精神を大事にしていく

うえで、今、世界の状況を見たときに厳しさが増していますが、そのような時代に、龍谷大学が果たされる役割は大きなものと思います。どうぞさらなるご発展をお祈りしまして、意を尽くせませんが、お祝いと御礼のあいさつとさせていただきます。ありがとうございます。

鍋島：京都市長、門川大作様、ご祝辞をたまわりありがとうございました。

それでは、世界仏教文化研究センターの開設に当たり、池上彰先生と竹村牧男先生を特別講師としてお招きし、「世界の苦悩に向き合う仏教の可能性」について、一緒に考えたいと思います。

池上彰先生も竹村牧男先生も、これまで混沌とした世界情勢を見据えながら、私たちにいくべき道を指し示してくださっています。池上彰先生は、ご著書『宗教がわかれば世界が見える』の中で、「宗教を知ることによって世界が見えてくる」と述べておられます。また、竹村先生は、世界での対立の紛争を超えるためにどうすれば良いかについて、『仏教は本当に意味があるのか』という著書の中で、「さまざまな思想の共存、少数意見の尊重などを目指しつつ、人々がおのおの、自己にとっての宇宙観、世界観、人生観を明確に自覚していくとき、社会は成熟の度を増すことができよう」と提言されておられます。こうしたお二人の知見に学べますことを本当に幸に感じます。

それでは、まず初めに池上彰先生をご紹介します。池上彰先生は長野県出身のジャーナリストでございます。1973年、慶應義塾大学経済学部卒業後、NHK記者として入局し、社会部などで勤務されました。社会部時代、警視庁をはじめ、文部科学省、気象庁など、さらには宮内庁などを担当されました。その後、NHK特集として教育問題やエイズ問題などの番組に携わり、1989年、首都圏向けのニュースキャスターをお務めになりました。1994年、「週刊こどもニュース」編集長、キャスターを務め、難しいニュースを本当に子どもたちに分かりやすく伝えるお父さん役として活躍されました。ご覧になった方、どれぐらいいらっしゃいますか。私も子どもと一緒に見ておりました。日本の父でございます。そして、2005年3月にNHKをご退職になられて、フリージャーナリストに転身なさいました。現在、名城大学教授、東京工業大学特命教授、立教大学客員教授などの場でご活躍中です。

さきほど池上先生は、トランプ大統領をめぐる情勢に昨年末振り回されていると、おっしゃっておられました。今日のご講演を皆さまと一緒に聞かせていただきたいと思います。それでは、池上彰先生、どうぞよろしくお願いいたします。